JASE
現代性教育研究ジャーナル
MONTHLY JOURNAL of SEX EDUCATION TODAY

2024年
No. 157
2024年4月15日（毎月15日）発行

日本性教育協会
THE JAPANESE ASSOCIATION FOR SEX EDUCATION

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-3冨山房ビル５階 Tel.03-5801-6788 Mail info_jase@faje.or.jp URL https://www.jase.faje.or.jp 発行人 石川哲也 編集人 小澤洋美
© JASE. 2024 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

HPVワクチンに関する日本の現状と課題 …… 1
北東北性教育研修セミナー2023後期報告 …… 6
新連載 "めぐみ"を生きる …… 9
わたしたちの性教育アクション⑬…… 10
多様な性のゆくえ㉞…… 11
出会いは世界を広げていく⑬…… 12
今月のブックガイド…… 13
JASEインフォメーション …… 14

HPV ワクチンに関する日本の現状と課題

キャッチアップ接種はあと１年、今年９月までに１回目を！ 男子はどうなる?!

埼玉医科大学 医療人育成支援センター・地域医学推進センター
／産婦人科／医学教育センター助教 高橋 幸子

はじめに

2020 年７月、『現代性教育研究ジャーナル』No.112 に「子宮頸がん予防のための性教育『でもね、ごめんね。みんなの学年はもう無料で打てないんだよ』」と題し執筆させていただいてから３年半の月日が経ちました。この間に 1997 年度～ 2007 年度生まれの女性にはキャッチアップ接種の機会が与えられ、気づけばそれもあと１年で終了となります。

①キャッチアップ接種、② 14 歳までの接種、③男子への接種、④ HPV ワクチンの効果、⑤副反応への対応、⑥ HPV ワクチン接種回数の検討、⑦子宮がん検診の方法や頻度について等、まだまだ課題は山積みです。

HPV ワクチンに関する日本の現状とそれぞれの課題について考えます。

日本の現状

キャッチアップ接種はあと１年！
10 万円分を無料で打つなら 2024 年９月までに

2020 年６月～ 2021 年３月にかけて、大学生等のグループ「HPV ワクチン for Me」による署名活動が行われ、その３月 29 日、３万筆の署名が厚生労働大臣に提出されました。当時、厚生労働省の田村憲久大臣は「HPV ワクチンの勧奨が止まったとき（2013 年）の大臣は自分だったので、再び自分が厚生労働大臣であるこのタイミングで、定期接種の再開をしたい」とおっしゃいました。2021 年 11 月には 2022 年４月からの HPV ワクチン積極的接種勧奨の再開が決定され、同時に 1997 年度生まれ以降のキャッチアップ接種が３年間行われることに決まりました。2023 年４月、９価の HPV ワクチンが定期接種の対象になりました。

2024年の現時点ではほとんどの人が迷うことなく９価のHPVワクチンを接種しています。

ところが、2025年４月以降、キャッチアップ世代だった人たちは費用の面で９価の接種をあきらめる場合でしょう。今年の高校生は、定期接種の１年生も、キャッチアップ接種の２・３年生も、全員が2025年３月までで無料接種が終了になります。高校生には全員に、2024年９月までに１回目を！の合言葉で伝えましょう（図１）。

HPVワクチンには２価・４価・９価の３種類があります（表１）。２価と４価が３回合計で約５万円です。ワクチンの効果として２価と４価は子宮頸がんの７割、そしてさらに４価は尖圭コンジローマになるＨＰＶ感染も防ぎます。９価は３回合計で10万円です。子宮頸がんの９割、そして尖圭コンジローマになるＨＰＶの感染を防ぎます。費用は定期接種／キャッチアップ接種期間中ならいずれも無料です。

大前提として、HPVワクチンの接種ベストタイミングはセクシュアルデビュー前です。もし、セクシュアルデビュー後だとしても、打たないよりは打った方が子宮頸がんになることを防ぐことができます（表２）。オレンジ色の線はＨＰＶワクチン非接種群です。年齢が進むにつれ子宮頸がんの発症人数が増えています。緑色の17歳未満でＨＰＶワクチンを接種した群からは、ほとんど子宮頸がんが出ていません。17歳から30歳でキャッチアップ接種を行った水色の群は、オレンジ色の半分に減少しているのがわかります。このように、セクシュアルデビュー後でも、接種した方がよいとされています。

2022年11月に来年４月からの９価導入が決定したのですが、この時、私が接した４人の医学生が一人ひとり異なる決断をしました。性教育的に大変興味深かったのでご紹介します（図２）。

医学生は、授業などでも正しくワクチンの意味を理解し、接種するかどうかの選択ができます。11月に１回目の接種の予約をしていた医学生は、予約日に外来ブースまで来ましたが、「９価が無料になるとニュースで聞きました。４月から打ち始めることにします」と予約を取り直しました。また、ある医学生は「４月から９価が無料で打てるようになることは知っていますが、もう今すぐに４価で１回目・２回目を接種します。３回目は９価で打ってもいんですよね？」

図１　2024年、中高生への呼びかけ

2024年、中高生への呼びかけは

- 高校生（女子）は9月までに1回目を
- 中学生（女子）は14歳までに1回目を
- 小6～高1（男子）は、無料で接種できる場合がある（自治体による）

表１　２価・４価・９価の違い

	2価	4価	9価
名称	サーバリックス	ガーダシル	シルガード9
予防できるウイルスの種類	2種類	4種類	9種類
予防できる疾患	子宮頸がん7割	子宮頸がん7割 尖圭コンジローマ	子宮頸がん9割 尖圭コンジローマ
3回分の費用	約5万円	約5万円	約10万円

表２　スウェーデンデータ

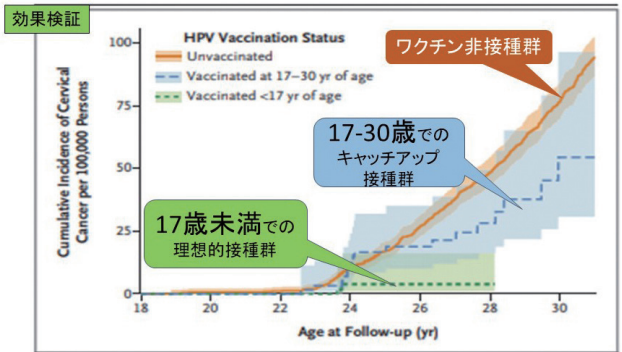


Figure 2. Cumulative Incidence of Invasive Cervical Cancer According to HPV Vaccination Status.
Age at follow-up is truncated in the graph because no cases of cervical cancer were observed in girls younger than 18 years of age.

（スウェーデンデータNEJM 2020 Oct 1;383(14):1340-1348.）より

図２　来年４月からキャッチアップ接種に９価が導入されるとわかったとき（2022年11月）の医学生のリアクション

と接種開始しました。

とてもうらやましい環境だったのは、保護者から「有料でもいいから、すぐに11月から９価で打ち始めなさい」と言ってもらった医学生です。保護者が医療従事者で、経済的に余裕がある上にHPVワクチンの意義を理解しておられるのだと思いました。はじめの接種から６か月後の、３回目の接種を予約していた医学生は、「３回目は４月になってから９価を接種することにしたい」と予約を変更しました。皆それぞれが９価のワクチンの意味と、自分の性行動を考えた上で、異なる行動を選択することがでました。きちんと理解していれば選択肢をつかみ取ることができるのだとわかり、大変興味深かったです。

14歳までなら２回で終了（９価の場合）、保護者への周知が急務

「中学生には14歳までに１回目を打とうね！」の声がけが大切です。2023年５月１日に中学３年生に講演を行った後、一人の女の子が私に聞こえるように大きな声で言いました。「わぁ、わたし、明日誕生日だわぁ」。あと１週間早くお伝えできていれば……と悔やまれます。

2023年４月より９価のHPVワクチンの場合、14歳のうちに１回目を接種すれば３回ではなく２回の接種で終了とすることができるようになりました。後ほど述べますが、今後接種回数は変更されていく可能性があります。中３では15歳になる生徒が出はじめますから、中２までの間に、「14歳までに打ち始めれば２回で終了となる」と伝えることは急務です。痛みは３回より２回のほうが少ないですし、副反応が起こる可能性は２／３に減ります。予算も２／３に減ります。

ところで、中学２年生という年齢を考えたとき、生徒への周知だけではなく、保護者の理解が大切です。本人が理解していても、保護者によるブロックにあうこともあります。2013年に副反応として繰り返し放送された被害者とされる女の子の動画が頭を離れず、怖いワクチンだという情報で止まっている保護者もまだまだいます。「本人は嫌がっていたのに自分が勧めたせいでわが子がそうなってしまったらと思うと、不安になりますよね。わかります」と不安を受け止めることも大切です。そして、あの騒動は何だったのかや、副反応が起きたときの救済があることなどを伝えれば、理解されることが多いです。また、郵便物（問診表やお知らせなど）が保護者のところで止まってしまっている可能性は大いにあります。手元にお知らせがなければ「保健センター」に連絡するとよいという具体的なアドバイスも必要です。

世界の動向から

男子のHPVワクチン接種で世界に後れをとっている

前回『現代性教育研究ジャーナル』に書かせていただいた頃からすでに、世界では男子へのHPVワクチン接種が行われていました。日本では2020年12月に予防できる疾患として肛門がんが加わり、４価ワクチンの男子への接種承認が下りました。2024年３月の検討会では男子への定期接種化は国としては見送られることになりました。米国では子宮頸がんより中咽頭がんの人数の方が多く、日本の耳鼻咽喉科の医師たちもHPVワクチンの啓発に力を入れていただきたいです。しかし、中咽頭がんへの適用が承認されていないため、製薬会社からの情報提供の際には「中咽頭がんを防ぐことができる」と言ってはならないのが現状です。海外では男子にも９価のHPVワクチンが接種されています。日本は男子への接種についても世界から後れをとっている状況です。

希望の光としては全国の10か所程度の自治体と、東京都の半分くらいの自治体（23区中15区と武蔵野市・町田市・小金井市）が男性への定期接種としての無料接種を開始していることです。「こんなの不公平だ！　全国の男子をがんや尖圭コンジローマから守って」と男性が声を上げなければいけません。SAIPE（彩の国連携力育成プロジェクト：埼玉県立大学・城西大学・日本工業大学・埼玉医科大学）の４大学の学生たちが2023年９月の「リレーフォーライフ川越」で作成した、男性向けのチラシ（次ページ図３）では、新たに咽頭ちゃんというキャラクターが作成されました。

署名提出のタイミングは重要だそうです。「男子へのHPVワクチン接種を無料に！」の署名は2021年11月に開始され2022年11月に１万５千筆の提出に至りましたが男性への定期接種化はすぐには叶わず、まだ継続しています。機会を狙ってもう一度男子へのHPVワクチン接種の署名を厚生労働省に届けに行かなければいけないかもしれません。

図３　男子向けのチラシ

HPV ワクチンの効果は証明され始めている

HPV ワクチンを 10 代で接種し、浸潤子宮頸がんを減少させたというデータが世界各国から出ています。非接種者の浸潤子宮頸がん発生率を１とすると、デンマークでは 86％減（Falcaro M, et al. Lancet. 2021; 398（10316）：2084-2092. Kjaer SK, et al.）、英国では 87％減（L.J Natl Cancer Inst. 2021;113（10）:1329-1335.）スウェーデンでは 88％減（Lei J, et al. NEJM 2020;383（14）:1340-1348.）でした。HPV ワクチンに反対する声の中に効果が証明されていない、というものがありましたが、HPV ワクチン接種開始から時間が経過し、子宮頸がんが実際に減っていることが証明され、ますます接種をお勧めする状況が整ってきています。

副反応への対応機関「協力医療機関」が決められている

2013 年ころに副反応で困った女性たちは、「ワクチンとは関係ない」と医療機関でなかなか受け入れてもらうことができず、大変な思いをしたといわれています。二度とそのようなことを起こさないという反省を踏まえ各都道府県にそれぞれ１か所以上、HPV ワクチン接種後のトラブルの診療を引き受ける協力医療機関が指定されています。

「ヒトパピローマウイルス感染症の予防接種後に生じた症状の診療に係る協力医療機関及び 厚生労働行政推進調査事業研究班の所属医療機関」（令和５年５月１日現在：欄外アドレス①参照）から、探すことができます。HPV ワクチンを接種した医師から、協力医療機関につなぐことになっています。接種後の体調不良が続く場合には、まず、接種医に相談してください。

HPV ワクチン接種回数は、９～14 歳で１～２回接種がメインへ

日本において 2024 年現在、９価の場合、14 歳までは２回、15 歳以上なら３回の接種をします。2022 年、WHO は HPV ワクチンの１回もしくは２回接種（HIV 感染者を含む免疫不全の人は３回か２回）を推奨としました。９～14 歳で、１回または２回の接種をメインとします。15 ～ 20 歳も１～２回、21 歳以上は６カ月以上の期間をあけて２回と示しました（欄外アドレス②参照）。オーストラリア・英国も定期接種の若年者は９価 HPV ワクチンの１回接種になりました（欄外アドレス③参照）。

日本で例えば３回の接種が完了できずに、２回で終わってしまっている人には、無料期間（キャッチアップ接種の対象者）であれば３回目の接種をお勧めするのですが、無料期間が過ぎている人には、「２回（もしくは１回）打ってあれば意味があるから大丈夫だよ」と伝えるようにしています。もちろんお金を支払って３回目まで接種しても構いません。

そして大切なのは、ワクチンを接種していてもいなくても、性行為を経験するようになったら 20 歳からは子宮がん検診を！　ということです。

子宮頸がん検診が変わる。30 歳からは５年に１回に!?

HPV ワクチンを打たない選択をする人も、予防をすることができます。子宮頸がん検診です。これまで

① https://www.mhlw.go.jp/content/001097011.pdf
② https://www.who.int/news/item/11-04-2022-one-dose-human-papillomavirus-(hpv)-vaccine-offers-solid-protection-against-cervical-cancer
③ https://www.health.gov.au/ministers/the-hon-mark-butler-mp/media/change-to-single-dose-hpv-vaccine

表３　これまでの HPV ワクチンを取り巻く状況年表

2009年10月	2価HPVワクチン（子宮頸がん）日本で承認
2011年7月	4価HPVワクチン（子宮頸がん・尖圭コンジローマ）承認
2013年4月	小6～高1定期接種開始（1994～1999年度生まれの7割が接種）
2013年6月	積極的接種勧奨の中止
2015年12月	名古屋スタディ報告
2016年11月	信州大学マウス実験（マウス1匹の脳に異常）の不備が明らかに
2017年12月	村中璃子氏「ジョン・マドックス賞（英国）」受賞
2020年4月	女子栄養大学サークルたんぽぽ　中3向けリーフレット発表
2020年6月	HPVワクチンforMeキャッチアップ接種を求める署名立ち上げ
2020年7月	9価HPVワクチン承認（2021年2月より任意接種開始）
2020年8月	みんパピ！クラウドファンディング
2020年12月	4価HPVワクチン男子への承認（肛門がん）取得
2021年3月	キャッチアップ接種を求める署名提出
2021年11月	次年度の積極的接種勧奨再開・キャッチアップ接種決定
2022年4月	積極的接種勧奨再開・キャッチアップ接種スタート
2023年4月	9価HPVワクチンが定期接種に加わる

は性行為を経験するようになったら 20 歳以上は２年に１度子宮頸がん検診を受診することが推奨されてきました。

子宮頸がん検診はこれまでほとんどが細胞診（がん細胞があるかどうか）で行われていましたが、2024 年４月からは年齢によって検査の方法が変わります（厚生労働省。自治体によって導入の時期は異なる）。30 歳以上はまずHPV検診（ハイリスク型 HPV がいるかどうか）を行い、陰性なら次のHPV検診は５年後です。がん化するのはHPVに感染してから５～10 年後だからです。HPV 検診が陽性ならその検体で細胞診を行い、必要に応じて精密検査に進みます。また、20 歳～ 29 歳はこれまで通り、細胞診検査が２年ごとに行われるとのことです。

HPVワクチンを接種していれば、子宮頸がん検診の結果でヒヤヒヤする可能性を９割も減らすことができるのです。

おわりに

最後に、これまでの HPV ワクチンを取り巻く状況をまとめた年表を掲載します（表３）。HPV ワクチンを打ちそびれたために、子宮頸がんで命を落とした年代の若者が出はじめてきている現在の状況を見ると、HPV ワクチンをもっと早くに再開できなかったのかと、本当に悔やまれます。

ジャーナリストの小島正美氏は、著書『フェイクを見抜く 「危険」情報の読み解き方』（唐木英明氏との共著・ウェッジ 2024 年刊）の中で、2015 年の名古屋スタディ報告（HPV ワクチンと症状の間に因果関係を認めない）や、2017 年の村中璃子先生のジョン・マドックス賞（英科学誌ネイチャーなどが主宰する公益に資する科学的理解を広めることに貢献した個人に与えられる賞）の受賞などを契機に、この辺りでマスコミは、日本の世論を動かすことができたのではないか、と指摘します。

しかし、今更言っても過去は変えられません。未来を変えていくしかないのです。キャッチアップ接種世代の大学生たちが欲しくて欲しくてやっと手に入れた、女性のための「10 万円分」の権利です。この権利はあと１年で終了です。９月までに、高校生～ 27 歳（1997 年度生まれ）の女性たちに、必ず情報を届けていきましょう。

◉北東北性教育研修セミナー 2023 後期　報告

トラウマを考察する

2024年2月23日（金・祝日）北東北性教育研修セミナーが、「トラウマを考察する」をテーマにリンクステーションホール青森（青森市文化会館）で開催された。その概要を実行委員会の共同代表である岡田実穂氏がレポートする。

北東北性教育研修セミナー実行委員会共同代表
Broken Rainbow – Japan 代表
岡田 実穂

はじめに

2023 年度は性暴力サバイバーが抱える「トラウマ」に焦点を当て、前期（2023 年 10 月 22 日開催。報告は本誌 2 月号 No.155 に掲載）、後期の 2 回に分けてセミナーを開催した。前期はトラウマを抱えその中を生きることを実践するサバイバーの個人としての日々の営みを中心に据え、後期はそのトラウマそのものがどういった影響を日々の暮らしに及ぼすものであるのかを考えた。

今回のセミナーではコロナ禍以降、初めてオンラインではなく現地開催をすることとなり、青森県青森市のリンクステーションホールの会議室にて 23 名の参加をいただき開催した。IPV（Intimate Partner Violence: 親密な関係における暴力）や性暴力被害者支援に関わる方、精神障害者や LGBTIQ ＋の当事者運動、権利擁護活動に関わる方、議員など様々な立場の方にご参加いただいた。

前期においては、「トラウマを語るとき」というテーマで LGBTIQA+ の性暴力被害に焦点を当て、自らの被害を語るということをどのように当事者として実践してきたか、それらの「語りにくさ」を踏まえ、どのように言語化、可視化することが可能であったかを当事者視点で振り返るということを行った。その中では、社会的に必ずしもトラウマ治療等に関する「専門領域の支援」とは呼ばれない、様々な文化的リソース（文学、漫画、アニメ、そして少しの隣人たちの優しさなど）が構築する、日々の暮らしを支える「サバイブツール」の重要性が多く語られた。

支援を考える上で、まさにその支援の対象となるサバイバーが日々実践している「今日を生きる」時間を理解することは非常に重要なことだ。様々な「支援」と言われるもの自体がサバイバーたちにとって日々を生き抜くためのツールの一つであり、その重要度も優先順位も人によって違う。求められているのは必ずしも専門的な支援ばかりではなく、その時々の「多様な選択肢」である。同じ時を生き、当たり前に身近にいる存在としての性暴力サバイバーにとって、優しい選択肢が今後、各所でより増えていくよう願っている。

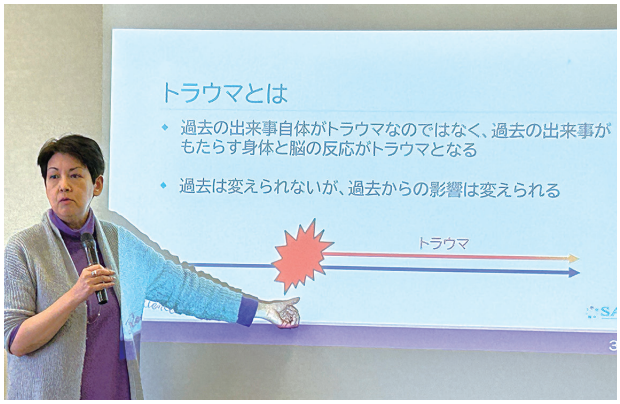
二部構成での開催

今回開催をした後期に関しては、改めて性暴力被害というものが被害にあった多くのサバイバーにとってどのような形で「トラウマ」として日常に食い込み、心身への影響を及ぼしているのか、そこに対し必要とされる「支援」とはどういったものであるのかを考えられればと、「トラウマを考察する」というテーマでの企画をした。企画は二部構成で、一部を NPO 法人レジリエンスの中島幸子（さちこ）さんからの『「性暴力」が

及ぼす影響』についての講演、そして二部は解離性同一性障害をテーマに制作された映画『「Team その子」上映＆トーク』とさせていただいた。

企画を立てるにあたり、前期後期の開催順が重要であった。この数年、性犯罪に関わる法律改正なども含め、性犯罪、性暴力に関わる社会資源は国内においても増加してきている。様々な文脈で性暴力被害者に対する支援が謳われるようになり、それ自体は歓迎すべきものである一方で、性暴力被害に関する情報が非常に公的な、もしくはアカデミックな専門知を有することを前提とするものとして扱われやすくなってしまったと感じることが増えた。様々な支援体制に公的な予算が計上されていく中では、当事者たちのナラティブに軸を置いた居場所の重要性は少しずつ見えにくくなってしまうのかもしれないと感じる。支援体制を構築していく上では、ここに至るまで培われてきた当事者としての「声の上げ方」、“SURVIVOR-CENTERED”な支援というものが忘れられてしまわないようにということを念頭に置かねばならない。

世界中で、「You are not Alone.（あなたは一人ではない）」というキャッチコピーが性暴力サバイバーの支援運動の中では多く使われてきた。孤立しているサバイバーたちに向け発せられるこの言葉は、「あなたを応援している人がいる」という支援者側から発せられる声であるのと同時に、これまで、世界中のあらゆる場所で性暴力被害にあってきた多くの、本当に多くのサバイバーたちがここにいるのだというメッセージである。少なくとも私は、そのような思いを持ってこれまでこの言葉を使ってきた。被害を自罰的に捉え自らを責め続ける人へ、この世に自分の気持ちを分かってくれる人などいないと自らの命を終わりにしたいと願う人へ、延々とつづく絶望の最中、どれだけ手を伸ばしても誰もその手をとってくれはしないと疲れ果ててしまった人へ、「その気持ち、私も感じたことがある。あなたは本当に、一人ではない」と伝える言葉。孤独だと思っても、その暗転した世界に光を照らせば、きっと仲間がたくさんいるのだ。性暴力サバイバーへの視点として第一義的に必要なものは、「支援者」と「クライエント」という視座に立つものではなく、“Always, living together.（いつだって、一緒に生きてる）”なのだと感じている。共に毎日を生きるサバイバーにとって、必要なものは何か、前期後期セミナーで、その順番を間違わずに学びを深められたらと思い、企画をした。



中島幸子さんの講演

「性暴力」が及ぼす影響

今回の講師である中島さんは、2003 年に「レジリエンス」を立ち上げ、自らに起きた DV や性暴力の経験に根ざした活動をしてこられている。DV、虐待、いじめ、モラハラ、性暴力、さまざまな暴力の経験をした「☆（ほし）さん」(レジリエンスでは様々な経験を生き抜いているサバイバーたちを、自ら輝く力を持つ存在であるという思いを込め☆さんと呼んでいる）たちの心の傷つきやトラウマに焦点を当てた活動として、暴力の影響、回復の方法、自分や人を大切にするコミュニケーションなどについて、研修や講演、ワークショップなどを実践されてきている。

近年では少年院での若者向けの講演等も精力的に行っておられ、本セミナーの中でも、若者たちとの対話の中で見えてきた課題、語りなどが多く紹介された。さまざまな暴力被害の影響が加害行動として現れることは珍しいことではない。性暴力の発生が比較的若年のうちから起きやすいことを考えても、若者世代に等身大で語りかける存在がいかに重要であるかは疑う余地がない。

本セミナーではトラウマそのものについての解説から、そのトラウマが影響するさまざまな困難のありよう、その影響の一つとしての解離性同一性障害（Dissociative Identity Disorder:DID）についてなど、中島さん自身、また出会ってきた多くの人々のストーリーなどに基づき丁寧にお話をいただいた。トラウマを経験する人々それぞれが抱える問題は実に多様なものがあり、それらをどう語っていくかは非常に難し

映画上映後のトーク（左は監督の友塚結仁さん）

い。被害者、加害者、〇〇障害、など（中島さん曰く「一次元のレッテル」）とレッテル貼りをしたところで、それだけでは語れないさまざまな要因もその困難の中にはある。

例えば、発達障害だからと言われても、それだけではない「安全が保たれていない場所で正しい判断など出来なかった」ということもたくさんあるだろう。トラウマという言葉は日本語訳される際には「心的外傷」、心の傷、というような言い方がされ、性暴力であればまさにその被害そのものが「トラウマ」として捉えられることが多くある。しかしトラウマが経験そのものであるならば、「トラウマからの回復」、「トラウマを軽減する」ことは叶わない（被害は薄れることも、消えてなくなることもない）わけであり、トラウマとは何かといえばその経験をした後の症状や反応である。その症状や反応に関しては、いわゆる精神疾患のような形で現れることもあれば、対人関係における繋がりの難しさなど、さまざまな形で現れる。身体の傷ではない、心に入ったその傷は時間と無関係に多くの影響を与え続けてしまう。話を聞けば聞くほどに、暴力が及ぼす影響の中で生きる人々の姿は、多様である。それでも中島さんが「わかりにくいことを、どうにかして伝える」ために紡ぎ出してきた言葉は非常に丁寧で、その一つひとつの語りの中に多くの当事者たち、そして中島さん自身の経験があるのだということを感じさせてくれた。

人はどのような関係性であれ人間関係の中で生きる。（中略）その中で安全で健全な「繋がり」が本当に大切だということ。もっと尊重しあえる関係性の中で、繋がり合うことができたら。

そうした思いの中で多くの☆さんたちに出会い全国を駆け巡りながら言葉を交わし続けていらっしゃる姿に、心から尊敬の想いを持ち、また、こうした「繋がり」の中でトラウマを軽減していくための支援というものが実践されていくことに、少なからぬ希望を見出す気持ちだった。「性暴力とは？」、「トラウマとは？」性暴力被害にあうということとは…、それらを簡潔に語ることは難しい。時間はかかるかもしれないけれども、言葉を積み重ねること、語ることをやめないこと。大切に、大切に紐解いていくこと。聞けば聞くほどに改めて、その重要性を感じる時間であった。

映画「Team その子」上映＆トーク

二部での「Team その子」の上映に関しては、ぜひ、全国各地で映画上映の機会を持っていただけたら、と思う。映画を制作した友塚結仁監督は、長年「レジリエンス」で中島さんたちと共に活動してきたアクティビストでもある。まさに、DV／IPV、性暴力等の「☆さん」たちと共にあり、解離性同一性障害という症状・反応と身近に暮らしてきたからこその描き方をされていると感じた。トラウマに関わる映画というものは世界中にたくさんあるわけだが、この問題と長く共にある人が制作したものであるというだけで、やはり安心感が大きいものだ。各所に映画を見ているであろう当事者たちへの配慮が散りばめられ、また、登場する一人ひとり（それぞれの人格）への優しい視点が溢れていた。ぜひ、多くの方に見ていただきたい。

セミナー終了後、参加者の方に話しかけていただいた。これまで出会ってきたさまざまな障害を持つ人たちのことを思い出して「あぁ、これがあの時、あの人が言いたかったことかもしれない」と思い当たることがたくさんありすぎて涙が止まらなくなっちゃった、と涙ながらに伝えてくださった。語ってくれる人がいるってこんなに嬉しいことなのね、ありがとう、まだ頑張らないとね、と言って帰られる姿に、私こそ感謝を伝えたい気持ちだった。

久しぶりの現地開催ということもあり、生で聞く話のパワーというものにも圧倒される思いであったが、ひとつのテーマというものを据え、そこに人が集まり共に学ぶ時間というものは、まさに地域における「安全で健全なつながり」にもなり得るのだろうと感じた。改めて、北東北という地域の中で少しずつの取り組みではあるがこうして場を持てていること、学ぶ機会をいただけていることに、感謝を伝えたい。

“めぐみ”を生きる

負けない、めげない、あきらめない

Profile 永井　恵（NAGAI Megumi）

トランスジェンダーとしての生き方をオープンにし、公立中学校の教員として生きる。多様な性のあり方やジェンダー平等の取り組みを、人権教育の視点から続けている。

新連載 第１回　連載のはじめに

読者の皆さま、はじめまして。私は千葉県の公立中学校の教員です。2018年にトランスジェンダー女性であることを、担任クラスの生徒や職場にカミングアウトしました。

今は、教務主任という立場です。校長のリーダーシップの下、学校運営や指導体制が充実するよう教職員と関わり、授業や部活動を通して生徒にも直接関わりを持ち、多くの保護者の方ともつながりを持つことができています。担当している教科は数学科と技術科、部活動は陸上競技部を長く受け持ってきました。

一言で言えば、どこの中学校にもいる先生です。トランスジェンダーであることを生徒たちは、ほとんど気にしていないのが実態だと思います。初めて声を聞いたときは、一瞬戸惑う生徒がいることも事実です。それでも、学校における関係性において、出生時に割り当てられた性別が何であろうが、性的指向・性自認が何であろうが、本質的な部分は一人の人間対人間だと私は考えています。このことを、様々な関わりの中で、理解したり感じたりしてくれることで、生徒たちの自然な受け止めにつながっているのだろうと考えています。

この連載では、昭和58年（1983）に生まれた私の自分史を通して、昭和の終わりから平成、令和に至るまでの社会の変遷を、一人のトランスジェンダーの視点からお伝えしたいと考えています。また、担任クラスの生徒にカミングアウトするまでの経緯や反応、生じた変化についてであったり、「学校という職場」で、どのようにスムーズかつ確実にカミングアウトをしていったのかについてもお伝えできたらと思います。それは、教職員のほとんどが、まだ「どうやらそういう悩みを持っている生徒がいるらしい」程度の認識でいた当時に、教員として「世間から見た模範的な生き方」を求められる中で、いかに戦略的にカミングアウトを進めたのかという、１つの例をお示しできるのではないかと思っているためです。

そしてよく聞かれる「なぜ学校に戻ったのか」という質問や、私自身の両親がどのようにして受け止めていったのかについても触れたいと思っています。今でも、いじめを経験したり、いないものとして扱われたり、悩みを誰にも伝えられなかったりするなど、当事者が苦しい思いをする場として、学校が挙げられる残念な現実があります。

また、身近で大切な人ほどカミングアウトがしづらい（嫌悪感を示される割合も高い）、その最たる例が両親です。私が４歳の時には母親に、カミングアウトに相当することをしているのに、当時は言葉も知識もなかったため、カミングアウトとしてまったく成立しませんでした。その時から、自分のセクシュアリティを封じ込める人生が始まりました。それから30年近くかけて、何度もアプローチする中で、両親が受け止めていってくれた過程についても、何か参考になることがあるのではないかと考えています。

カミングアウトをしてから、少しずつ、当事者児童生徒の支援や相談に関わる機会が増えていきました。そして、学校現場におけるジェンダー平等を目指した取組を進めていくこともできました。具体的な取組が形になっていくにつれて、講演や研修の場に招かれることも多くなりました。そのような取組については、回を追ってお伝えしていきたいと思います。

現在の職に就いてからカミングアウトするまでの10年間は、「どうやってカミングアウトするか」を考え続けてきました。時代が追いついてきたと感じる今は、「どうやって差別をなくすのか」を考え続けています。

連載を通して、読者の皆さまにも考えるきっかけを提供していけたらと思います。私の個人的な感情も包み隠さずお伝えしていくことで、これからカミングアウトに向き合うかもしれない方や、今現在向き合っている方に、何か少しでも参考になることがお伝えできたら、うれしいです。

これから１年間、どうぞよろしくお願いします。

わたしたちの性教育アクション

#13

持続可能な事業の形で日本のSRHRを盛り上げたい

性の健康イニシアチブ

健康的な人間関係について発信

2023年1月頃から、健康的な人間関係について発信する「私もOK、あなたもOK」プロジ++ェクトを始めました。OKとは「違和感がない、我慢をしていない、心地よさがある」といったことを指します。

このプロジェクトでは、まず4月にイベントを開催しました。SNSでの呼びかけを中心に10名の参加者が集まってくれました。前半でキーノートトークとして「健康的な人間関係や尊厳と権利」に関する話題提示をし、後半でキーノートトークの内容をより深く理解するワークショップを行いました。この時に参加者から挙がった率直な声が、プロジェクトのその後の活動にヒントを与えてくれました。

ギャラリーから始まる性の健康と権利

2023年、特にユニークな活動だと自負しているのが、ギャラリー（画廊）を借りたイベントです。東京都豊島区の豊島区国際アート・カルチャー特命大使／SDGs特命大使としても活動しているご縁で、豊島区巣鴨のギャラリー「ギャラリー＆クラフト杜」を1週間お借りし、展示、ワークショップ、トークイベント、物販を組み合わせたイベントを行いました。

「私もOK、あなたもOK」プロジェクトで発表した「健康的な人間関係のための10個のキーワード」と、そこからインスパイアされた写真を展示しました。昼間はワークショップ、夜はトークイベントを展開し、社会学者、性の健康に関するメディアの編集長、デートDV防止教育の団体の代表、産婦人科医、薬剤師など、専門性の異なる多様なゲストを日替わりで迎えたことは大変好評でした。物販では、性の健康イニシアチブがオススメしている書籍を扱いました。

「第３木曜日の夜に」を開催

カジュアル＆アカデミックに語れる場（BAR）を作るという取り組みも行っています。ざっくばらんなトークができるように、アクセスのハードルを下げて、講演や研修という形とは違った場所を作りたいと思い企画しました。来た人ひとりひとりが主役になれるように（比喩的な意味で）マイクを回します。東京・御茶ノ水駅から徒歩数分のBAR をお借りしています。2024年はほぼ月1回ペースで開催予定です。

ギャラリー（画廊）を借りたイベント

持続可能な形づくり

ギャラリーやBARを借りてのイベントをはじめ、企画のユニークさは自分たちの強みの1つではないかと思っています。これからもこの強みを活かした活動を目指します。また、「社会活動」の文脈に留まることなく、事業収入を得て雇用（業務委託も可）を生んで、事業として持続していく組織を確立したいという構想も持っています。

強みを持った人材が仕事として時間と労力とスキルを投下することができるような形が可能になれば、クオリティの高いアウトプットが生み出せるはず。その結果、この領域がもっと活性化するのではないでしょうか。2024年はその実現を目指して動いていきます。

（文責・柳田正芳）

性の健康イニシアチブ
代表　柳田正芳

「社会学」、「心理学」をはじめとした、人文社会科学を学んできたメンバーが中心の組織。「尊厳」、「権利」、「自己決定」、「人間関係」など人文社会科学が深めてきた視点から「性の健康と権利」のためにできることを最大限追究している。
https://sexualhealth-initiative.org

多様な性のゆくえ

One side／No side [84]

宮田 一雄
みやた　かずお
ジャーナリスト。公益財団法人エイズ予防財団理事、特定非営利活動法人エイズ＆ソサエティ研究会議事務局長。

『HIV とともに生きる』

社会学者でエイズアクティビストでもある明治大学専任助教、大島岳さんから著書『HIV とともに生きる――傷つきとレジリエンスのライフヒストリー研究』（青弓社）を送っていただいた。300 ページを超える大著の序章（性と病／健康をめぐるフィールドワーク）の冒頭にはこう書かれている。

《本書は 2020 年 10 月に一橋大学大学院社会学研究科に提出し受理された博士学位論文をもとに、大幅に修正・加筆したものである》

何の自慢にもならないが、私には学生時代、卒論の口頭試問で３人の教授・助教授から「書いたのは分かりますが、何を書きたかったの？」と問われ、「書かないと卒業できないから」と答えた記憶がある。

後は雑談で終始し、それでも最低の成績で卒業は認められた。50 年以上前のことだ。当時は留年する学生が多く、希望者はさっさと卒業させないと溜まってしょうがないといった事情もあったのではないか。今になってそう推測する。

そんな記憶のせいか、博士論文などといわれると、たちまち怖気づいてしまう。参考までに紹介しておくと、書籍化される前の博士論文については、一橋大学大学院社会学研究科・社会学部のサイトに論文審査要旨が掲載されている（欄外アドレス参照）。

書籍に戻ろう。短い紹介文が表紙に載っている。

《ゲイ男性を中心に HIV 陽性者百余人と交流し、22 人のライフヒストリーを聴き、かれらが書いた手記などの史資料も読み込み、生活史に深く迫る。傷ついた生の意味を協働で探り、親密性や共同性を育む「生きるための理論」を探求するラディカルな生活史研究》

大島さん自身の HIV 感染にも言及しているので合わせるとゲイ男性 22 人、女性１人計 23 人の HIV 陽性者のライフヒストリーが紹介されていることになる。学術研究とジャーナリズムの分野では、微妙な差異があるかもしれないが、報告に自らの事情（いわば私情）を差し挟むことには、プラスの側面とマイナスの側面があるように思う。

プラス面は自らの経験や当事者性を踏まえることで、記述の説得力が増し、個人の内的な真実も含め、現実の把握に肉薄できる点にある。

マイナスの方は、個人の経験に影響を受け、客観性に欠ける恐れがあることだろう。バイアスがかかる危うさも抱えることになる。

本書においては、あえて 23 人目の当事者としての自らの情報を開示したことが、内容に厚みを加え、どうしてこの研究テーマを選んだのかという点でも説得力を増す成果をもたらしていると思う。

例えば、こんな記述がある。

《日本の性感染陽性者の経験は、陽性者自身のエンパワメントよりも、むしろ陰性者への予防啓発を目的として「予防の失敗」の教訓というスティグマ化された筋書きで語られることが多い》(P63)

国連が「2030 年までのエイズ終結」という大目標を掲げ、その実現に向けて世界全体がまい進するかのような現状においてもなお、「予防の失敗」に対するスティグマ化された筋書きの再燃、もしくは強化に対する危惧は常に存在すると考えなければならない。

研究の出発点は以下の３つの問いだったという。

1.「HIV とともに生きる」とはどういうことか。
2. HIV/ エイズが「死」を文字通り身体に刻むスティグマとされていた時代に、当事者と支援者・救援者は HIV とともに生きる者の全体論的な生と個別的な生活の質を向上させるためにどのように協同しどのように社会にはたらきかけていったのか。
3. なぜ医学的治療は、患者の苦しみをしばしば減少させるのではなく増大させるのだろうか。

２番目の問いについては、第３章（当事者から始まるエイズ・アクティヴィズム）で詳しく分析されている。1990 年代に長谷川博史さんが創刊したゲイ雑誌『G-men』、同時期に長谷川さんとは別の HIV 陽性スタッフが創刊した医療情報誌『SHIP NEWSLETTER』のテキスト分析、およびその関係者へのインタビューは多くの示唆に富んでいる。次回でさらに紹介しよう。

https://www.soc.hit-u.ac.jp/research/archives/doctor/?choice=exam&thesisID=470

出会いは世界を広げていく

交流会を通して

第13回

土肥いつき DOHI ITSUKI
京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

交流会人生のはじまり

前号では、わたしの勤務校の社研での話しあいのひとコマを紹介しました。社研の活動は、単にそれぞれがそれぞれのできごとを語りあうだけではありませんでした。例えば、わたしのクラスにいた在日コリアン生徒Sさんが、社研の活動を通して本名を名のることを決意したということもありました。Sさんの決意は、社研で一緒に活動する生徒や他校の在日コリアン生徒のCさんなど、さまざまな仲間との出会いの中で生まれたものでした。わたしがやったことは、社研という「場」を通した出会いをコーディネートしたことだけでした。そのかかわりは、前々号(2月号)で書いたNさんへの「本名を名のらせる」かかわりとはまったく異なるものでした。Sさんの姿から学んだことは、マイノリティ生徒はピアな存在と出会うことでアイデンティティを獲得し直していくということでした。

1993年、H高校の教員から自校の朝鮮文化研究会（以下、朝文研）と社研の交流をしたいという連絡がありました。私はふたつ返事でOKして、さらに、Sさんの本名宣言のきっかけになったCさんにも声をかけ、2校＋ひとりの合同交流会を開催しました。この合同交流会がきっかけとなって、京都在日外国人生徒交流会（以下、在日交流会）ができました。在日交流会には、それ以降、社研や朝文研がない学校からも参加してくれるようになりました。参加者のエスニシティは、コリアンや中国、あるいはモンゴルやボリビア、さらにはロシアなど多岐にわたります。また、日本人とのダブルの生徒も来ます。さらに、各地でとりくまれている交流会が集まる「全国在日外国人生徒交流会（以下、ゼンコー）」に参加したりもしています。

一方、私の勤務校に在日外国人はそれなりに在籍していますが、みんながみんな社研に参加してくれるわけではありません。せっかく在日交流会を立ちあげたのに、自分自身が生徒をつれていけない状態が続きました。ある時、他校の引率教員に「主催者が自校の生徒をつれていけなくてもうしわけない。交流会をやる資格はない」という主旨のグチを言いました。すると、みんなは「この交流会の存在が貴重なんだ。だから続けてくれるだけでいい」と言ってくれました。その言葉を支えに、今も在日交流会の活動を続けています。

さらに、高校を卒業してしまうと、意外と居場所がなくなります。そこで、2009年に、ゼンコーの卒業生と一緒に「卒業生の会」を立ちあげました。卒業生の会のメンバーは、毎年開催されるゼンコーの運営にもかかわってくれています。

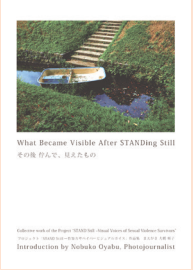
1997年、私は自分がトランスジェンダーであることを知り、1999年頃から性別移行をはじめました。2004年にたまたまNHKの番組に出たことをきっかけに、他府県のトランスジェンダーの高校生から相談メールが来るようになりました。その時、「在日外国人生徒のための交流会をしている自分が、自分の後輩たちのための交流会をつくらなくてどうする」と思いました。そして、2006年にようやく5人のトランスジェンダーの高校生・専門学校生を集めた交流の場を持つことができました。当日のプログラムは、在日交流会と同じく「昼ごはんをつくる」、「昼ごはんを食べる」、「自己紹介をする」でした。交流会が終わって、そのままみんなで焼肉を食べに行き、カラオケに行き、解散の時に「どうする？　これからもこんな交流会やりたい？」とたずねました。すると、全員が「やりたい」と即答しました。そこで年に4回交流会を開催することをその場で決めました。これがトランスジェンダー生徒交流会（以下、交流会）のはじまりです。

当日の参加者の感想を紹介します。

めちゃくちゃ緊張した分、あまりにも自由であっけにとられた、皆料理夢中やし、いつきさんはビール飲んでるし（笑）。初めて多くの同じ人に出会えて、しかも話できて、あん時はホンマに新たな一歩を踏み出した気がした。話し聞いて理解してくれた時にうれしくて必死で涙堪えてたりしたよ。恥ずかしい話ですが（笑）。

この時から18年間、交流会を続けています。次号には、交流会のその後について書くことにします。

BOOK GUIDE
今月のブックガイド



What Became Visible After STANDing Still
その後 佇んで、見えたもの

プロジェクト「STAND Still―性暴力サバイバービジュアルボイス」作品集（まえがき／大藪順子）
発行　STAND Still 事務局
頒価 3500 円

性暴力から立ち上がり、佇む人が見ている世界

水路に浮かぶ小舟と土手を登る階段。岸辺に生える草や葉の深い緑のなかに、ぽっかりと明るく映る無人の小舟。だれも映っていない写真には、しかし、たしかな息遣いを感じる。到着の、あるいは、旅立ちを思わせる１コマ。これは、「だれか」が被写体になるのではない。「だれかの」まなざしを映し出した１枚の写真である。

『ながいながい旅路』(2022 年、マリア 36 歳）と題する作品は、性暴力サバイバーが参加したプロジェクト「STAND Still―性暴力サバイバービジュアルボイス」の作品集の表紙を飾るものだ。ワークショップを実施したフォトジャーナリストの大藪順子氏は、プロジェクトのねらいをこう語る。「写真家の私がサバイバーを撮るのではなく、被写体にされがちなサバイバーが写す側に立つことで、彼女たちの世界を可視化し、ナラティブの転換を発生させる」。収録された作品はどれも、性暴力を経験した女性たちの「目」を通した今を描き出すものである。そして、性暴力だけではない、さまざまな「経験」から生きる声が綴られている。

大藪氏は、2007 年に出版した『STAND――立ち上がる選択』(いのちのことば社 フォレストブック）において、その８年前に体験した自宅でのレイプ被害とそれからの日々を記している。当時、実名での性被害の開示はまだ少なく、カメラのファインダーを構える大藪氏の顔写真の表紙とともに、社会的にも大きなインパクトをもたらした一冊である。

この本では、2001 年からアメリカとカナダで取り組んだプロジェクト『STAND：性暴力サバイバー達の素顔』によるサバイバー男女 70 名との出会いとインタビューの様子が写真とともに紹介されている。国内外で開かれた作品展に足を運んだ人もおられるだろう。

それから 18 年を経て、2019 年から 2023 年まで５年間にわたってワークショップが行われ、このたび作品集が発刊された。プロジェクトについて、「公に MeToo と言えない、または言わないことを選択してきた人にも、不特定多数の人が観る所で作品発表を可能にしてきた」と大藪氏は言う。このプロジェクトの特徴は、性暴力サバイバーが「写す側に立つ」というだけでなく、性暴力を受けたという自分の人生を語らないこと、自分の表現すべてに被害体験を結び付ける必要はないこと、自分の力を自分で取り戻すことなど、あらゆる「決定権」や「意思」がその人自身にあることを確認する手立てとして、写真という表現活動が行われていることであろう。

印象深かった作品に、『ベンチから、続く道』(2020 年、Nobu 60 歳）がある。湖畔に立つ緑の木の下に置かれたベンチ。だれも映っていない風景を前に回想されるのは、もう何十年も前の「公園のベンチが突然危険な場所に変わった日」。そして今、近所の公園のベンチを心地よい場所だと気づいたという Nobu さんは、こう続ける。「悪いのはその子どもではない」。フィルター越しにかけるその声は、幼かった自分自身にかけるものであり、写真を通してすべての人たちに届けたいメッセージでもあるだろう。

大藪氏の『STAND』から始まった取り組みが、〈立ち上がった〉のちに『STANDing Still』として〈佇んで〉社会を捉え続けていることも感慨深い。「性暴力を取り巻く社会変化を静かに見つめている」という意味のプロジェクトが問うのは、性暴力のない社会を変えていくのはサバイバーの声だけであってはならない、ということだろう。サバイバーの声や作品は、本人のエンパワメントのためにある。社会を変えていく責任をサバイバーに負わせすぎていることに気づかされるメッセージであった。

（大阪大学大学院教授　野坂祐子）

※購入は、STAND Still 事務局メール（standstilljapan@gmail.com）まで、氏名、住所、電話番号、必要部数を記載のうえ申込み。
ホームページ https://standstill.jimdofree.com/

研究会、研修会等の情報を下記まで、郵送または、
Fax03 ～ 5801 ～ 6677 でお寄せください。
〒101-0051 千代田区神田神保町 1－3 冨山房ビル５階
日本性教育協会「JASE ジャーナル」係

日本性教育協会（JASE）移転のお知らせ

事務局と資料室を下記のとおり移転いたしました。今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

【記】

住 所　〒 101-0051　東京都千代田区神田神保町 1 － 3　冨山房ビル 5 階
電 話　03-5801-6788　FAX 03-5801-6677
Email　info_jase@faje.or.jp（変更なし）

東京メトロ半蔵門線／都営新宿線／都営三田線「神保町」駅A７出口より徒歩3分

★「JASE 性教育・セクソロジーに関する資料室」のお知らせ★

【開室日・時間】月～金曜日　しばらくの間 11：00 ～ 17：00
【新資料室の利用予約】必ず事前に電話で予約が必要です
TEL03-5801-6788

→資料室案内

9月15日(日)11：30～17：00（2部構成）

第23回日本性科学連合（JFS)性科学セミナー

セクシュアリティと法律・社会のいま2024

～ミルトン・ダイアモンド先生追悼記念～

プログラム

第1部 11：30～12：30 「ミルトン・ダイアモンド先生追悼講演会」
講師：池上千寿子・東　優子・小貫大輔

第2部 13：00～17：00 「セクシュアリティと法律・社会のいま 2024」

① 13：10～13：40　講師：加藤育民（日本思春期学会）
16歳以上、無料で受けるなら今月中に始めないと！
日本から子宮頸がんを撲滅できるのか～ＨＰＶワクチン接種を広めなければ～
Q&A　13：40～13：50

② 13：50～14：20　講師：高橋 聡（日本性感染症学会）
報告数急増の衝撃！
梅毒をはじめとする性感染症の現況について
Q&A　14：20～14：30

③ 14：30～15：00　講師：針間克己（日本性科学会）
手術なしで性別変更が可能となるか？
性同一性障害者特例法に関する最高裁違憲判決後の現況と課題について
Q&A　15：00～15：10

④ 15：30～16：00　講師：小貫大輔（日本性教育協会）
生理痛で高校入試の追試が可能に！
日本や世界で広がる「生理の貧困（月経をめぐる社会的公正)」の運動について
Q&A　16：00～16：10

⑤ 16：10～16：40　講師：北村邦夫（日本家族計画協会）
この7年間で何が起きたのか？
大きく変わった日本人女性の性意識・性行動～「第9回男女の生活と意識に関する調査」結果から～
Q&A　16：40～16：50

16：50～17：00 閉会挨拶

会　場 札幌医科大学 臨床教育研究棟講堂
（北海道札幌市中央区南1条西16丁目）

参加費・問い合わせ先等

参加費／第1部：2,000円（昼食付き）
第2部：一般3000円、第43回JSSS学術集会参加者2000円、学生無料

問合せ先／日本性科学連合（JFS）事務局（〒113－0033 東京都文京区本郷3-2-3-4F 日本性科学会内）
TEL：080-1242-5025　FAX：03-3396-8226　E-mail：info@jfs1996.jp　URL：http://www.jfs1996.jp

※翌16日（月・祝日）8:30～16:00、同会場にて第43回日本性科学会（JSSS）学術集会「多様性とギャップを考える」が開催されます。

6月29日（土曜日）8：55～18：00（受付8：00～）

日本「性とこころ」関連問題学会第13回学術研究大会

性被害からの回復
どのように立ち上がるかを語ろう

【プログラム】

9：00～9：55　大会長講演「性とこころの回復の行方」　講師：伊藤 桂子（東邦大学 教授）

10：00～10：55　現代のトピックス「STANAD Still ～立ち上がる選択」　講師：大藪 順子（フォトジャーナリスト）

11：00～12：00　教育講演「病院拠点型ワンストップセンターの役割―急性期介入の重要性」
講師：片岡 笑美子（日本フォレンジックヒューマンケアセンター 会長）

13：00～15：20　メインシンポジウム「性被害からのそれぞれの回復」
シンポジスト：川本瑞紀（みずき法律事務所　弁護士）ト田素代香（性力被害者支援情報プラットホーム THYME）
塩田規子（児童養護施設クリスマスフォレスト）宮崎浩一（『男性の性暴力被害』共著者／臨床心理士）

15：30～16：30　基調講演「ルポ性暴力 ―記者がみた性暴力被害の実態とは」講師：大久保 真紀（朝日新聞 編集委員）

16：40～17：50　公開講座「事件の涙 ―ジャニーズ性加害問題とは一体何だったのか」
講師：二本樹 顕理（1 is 2 many 子どもへの性暴力を根絶する Action Plan 発起人）

会　場　ホテルメトロポリタン（〒171-8505　東京都豊島区西池袋 1-6-1）

参加費・問合せ先等

参 加 費／会員（事前）2000円、一般（事前）3000円、学生（事前）1000円など。
詳細は、http://www.jssm.or.jp/top/13top/13registration/
問合せ先／日本「性とこころ」関連問題学会　学会事務局（東京都豊島区西池袋1-2-5 榎本クリニック内）
Mail. sei-kokoro1@enomoto-clinic.jp　Tel. 03-3982-5345　Fax. 03-3982-6089

ＪＡＳＥ性教育・セクソロジーに関する資料室

資料室について

JASE 資料室は国内外の性教育、性科学等に関する文献資料を収集している開架式資料室です。文献資料の数は約6万点以上、現在も日々、増え続けています。性教育、セクソロジーに関する調査、研究のためにご利用いただけます。人間の性に関心がある方、ぜひ足をお運びください。

資料室利用方法

【閲覧予約】事前に電話で予約が必要〔tel 03-5801-6788〕。貸出業務は行っておりません。
【開室日・時間】月～金曜日しばらくの間 11: 00 ～ 17: 00
【休室日】土・日曜日、祝日、年末年始　※この他、臨時に休室することがあります。
【コピーサービス】コピー料金は用紙サイズにかかわらず1枚10円です。著作権法の許容する範囲で行うものとします。
https: //www.jase.faje.or.jp/pub/archive.html

収集文献・資料

統計･調査報告書、ジェンダー･フェミニズム、性教育一般･性教育の歴史的資料、セクソロジー、民俗学･文化人類学・風俗、性研究史・性学史、教科書・指導書・学習指導要領、国内学術誌、国際（海外団体資料・海外学術誌）、高齢者・家族問題、文学・評論・エッセイ・文庫・新書、官公庁資料、JASE刊行物、映像資料、個人論文、雑誌記事、新聞記事、絵本・写真集、ダイアモンド文庫、団体資料・手引き・白書（都道府県資料、大学関連資料、官公庁資料など）ほか。

→資料検索
https://opac.jp.net/Opac/search.htm?s=NS1JEYq24WsoCGy_N7GNQ_WQaeg

好評発売中！

ピアカウンセリング実践ガイドブック

ピアカウンセリング・ピアエデュケーション研究会／髙村壽子　編著

◆B5判：160頁　頒価3000円（税込）

主な内容

第1章　なぜ、ピアカウンセリングなのか――主体的な生き方を支える健康教育の一方法

第2章　主体的な生き方を支えるピアカウンセラーの養成

2-1　ピアカウンセラーになるために

2~2　カリキュラム展開の実際　Ⅰ

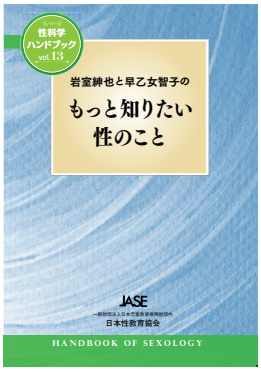
2~3　カリキュラム展開の実際　Ⅱ―セクシュアリティについて

第3章　主体的な生き方を支えるピアカウンセリング活動実践紹介――ピアカウンセリング手法による性＝生の健康教育を中心に

中学校のピアエデュケーション（対面方式）、中学校のピアエデュケーション（遠隔方式）、高校のピアカウンセリング／ピアエデュケーション（ハイブリッド方式）、駅ナカ保健室（ピアカフェ）、教育支援センター（不登校適応指導教室）におけるピア活動、特別支援学校ピアエデュケーション、リフレッシュママクラス®、グループピアカウンセリング講座

第4章　コロナ禍におけるピアカウンセリング養成講座の評価

第5章　ピアカウンセリング活動を支えるしくみ／システム



好評発売中！　性科学ハンドブック Vol.13

岩室紳也と早乙女智子の
もっと知りたい性のこと

岩室紳也・早乙女智子著

◆A５判：138頁　頒価700円（税込）

『現代性教育研究ジャーナル』2014年４月号～2017年３月号に連載した「もっと知りたい女子の性／もっと知りたい男子の性」に、加筆・訂正して再構成したものです。

主な内容

part 1　多様な性／「性」を科学する難しさ／女は女として生まれない／性別違和／ジェンダーバイアス・ジェンダーギャップ　ほか

part 2　女性の性／ 膣VAGINAはくぼみである／女子もします！　マスターベーション／人工妊娠中絶と女性の身体権　ほか

part 3　男性の性／「包茎」を科学する／男子はおちんちんで育つ／「男」は環境で育つ性／男性の性機能って何？　ほか

著者プロフィール

岩室　紳也／泌尿器科医。ヘルスプロモーション推進センター（オフィスいわむろ）代表。AIDS 文化フォーラム in 横浜運営委員。

早乙女智子／産婦人科医。公益財団法人ルイ・パストゥール医学研究センター研究員、日本性科学会副理事長。セックスセラピスト。

※ご購入・送料等は、ホームページを参照してください。

◆ JASE ホームページ https：//www.jase.faje.or.jp/pub/pub.html からお申し込みいただけます。
または、Email　info_jase@faje.or.jp
TEL 03-5801-6788　FAX 03-5801-6677

すぐ授業に使える

性教育実践資料集

中学校改訂版

〈主な内容〉

第１章　中学校における性教育（性教育を実践するにあたって／性教育の目的と意義）

第２章　性教育の実践（性教育の現状と実践の課題／学習指導要領における性教育の取り扱い／性教育の指導体制／指導計画の作成／性教育実施上の留意点／家庭・地域との連携／中学校の性教育の今後に向けて）

第３章　指導事例（各学年における指導計画と指導の流れ／８つの１年生の指導事例／６つの２年生の指導事例／６つの３年生の指導事例／７つの個別指導事例／５つの組織の指導事例）

第４章　参考資料（性行動経験率／性的なことへの関心割合／自慰経験率／性的関心の経験割合の推移／性へのイメージ／性感染症報告数の推移／梅毒患者報告数の推移／HIV・エイズ感染者の動向／人工妊娠中絶実施率及び推移／用語解説）

定価 2,200 円（税込）　B5 判・224 ページ

「若者の性」白書

第8回　青少年の性行動全国調査報告

〈主な内容〉

序　章　第８回「青少年の性行動全国調査」の概要

第１章　変化する性行動の発達プロセスと青少年層の分極化

第２章　青少年の性規範・性意識からみる分極化現象

第３章　家庭環境や親子のかかわりの違いは青少年の性行動に影響を与えるか

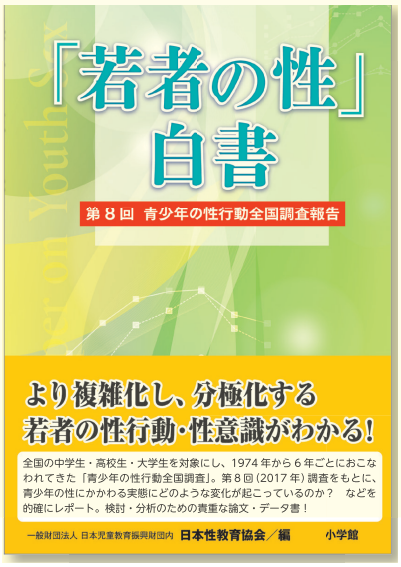
第４章　知識・態度・行動の観点からみた性教育の現状と今後の課題

第５章　青少年の性行動と所属集団の性行動規範

第６章　青少年の避妊行動の実態と包括的性教育の可能性

第７章　性的被害と親密性からの／への逃避

第８章　青少年の性についての悩み
～自由記述欄への回答からみえるもの～



定価 2,420 円（税込）Ａ５判・256 ページ

編／一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会　　発行／小学館

全国の書店にて、ご購入いただけます！